

With コロナ状況下のスポーツ鬼ごっこ実施に関わる安全・安心

(鬼ごっこ総合研究所 研究員) 岡村尚美

キーワード: Covid-19 感染症予防 スポーツ鬼ごっこ

著者略歴: スポーツ鬼ごっこ日本代表. IOA 公認2級ライセンス指導員・審判員.
ONI リーグ所属の相模・湘南ハンターズや地域選抜の近畿連合チームにて選手活動を続けつつ, 国内外での鬼ごっこの普及・指導・審判実績も多数有する. 2019年より鬼ごっこ総合研究所 研究員, 日本かくれんぼ協会 理事. 博士(工学).

■研究背景

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い, スポーツ鬼ごっこ関係者においても全国的な活動自粛が余儀なくされた. 新型ウイルスの発生は脅威であるが, スポーツ活動を原因とする既存ウイルスの集団感染はこれまでもコンタクトスポーツを中心に事例が報告されており, 感染経路の遮断やワクチン接種による予防が主なリスクマネジメントとして考えられてきた[1]. しかし, “絶対的”な予防策はなく, スポーツ等実施のガイドライン作成の上では関係者の“合意がとれている”ことが安全・安心をもたらす重要な要素となる. With コロナ時代に各人の心身さらには地域の健康を維持するためには, 各種目に適した感染予防ガイドラインを定め, スポーツ実施環境を維持していくことが必要である.

■課題設定

スポーツ鬼ごっこは遊び・ゲームとして誰もが楽しめるようにそのルールを発展させてきた. With コロナの状況下でも例えば「タッチによるプレーヤー同士の接触は危険だ」という短絡的な考えで活動停止やタッチに関わるルール改変を行うのではなく, これまで実施されてきたスポーツ鬼ごっこの中に自然と感染予防策を組み込むことが重要である. 本発表では, 一般的な感染予防策とそれに対する人々の安心感・満足感を考慮し, With コロナ状況下のスポーツ鬼ごっこ実施方策について考える.

■研究方法

青少年スポーツ関係者を対象とした調査研究[2]を基に, スポーツイベント実施において取られる主要な感染症予防対策の中から, 充実度・満足度の高い対策をピックアップした. 各対策について, スポーツ鬼ごっこを対象とした場合にどのように実施すべきか, また他のスポーツ種目と比較した有意性があるかを考察した.

■分析・考察

ここでは, 上記調査[2]において上位に位置した3項目について, スポーツ鬼ごっこの特徴を踏まえての考察を述べる.

(1) 手指消毒

プレーヤーや審判の手指消毒はこまめに行うほど感染リスクを低減させ、また関係者の安心感をもたらすことができる。消毒タイムは、ゲームの流れを妨げずにこまめに確保することが望ましい。スポーツ鬼ごっこは、ハント後に必ずプレーが切れ、リスタートエリアに全員が戻る必要がある。この時に消毒を義務付けることで、ルール改変を伴わずに消毒作業を実施できる。また、ハントまでの時間は概ね20秒から1分程度であるため、十分な消毒回数を確保できると考えられる。

(2) コートや用具の消毒

特別な用具を使用せず、どこでも実施できるのがスポーツ鬼ごっこの利点である。唯一プレーヤーが振れる道具としてトレジャー（宝）があるが、原則1つのトレジャーを1名が触る（ハントする）とゲームが止まるため、複数人が用具を使いまわすことなく確実に消毒作業を行うことができる。試合の場合、この消毒作業は副審が行うことによって、追加の人員を必要とせずに運営することが可能である。

(3) 選手同士のパーソナルコンタクトの制限

スポーツ鬼ごっこの大原則の一つに「ぶつからない」がある。前提として人と距離をとりながら移動することが重要なスキルであるため、他のボールゲーム型チームスポーツと比較するとプレー中の選手間距離は確保しやすいと考えられる。相手チームのプレーヤーへの「タッチ」は主要動作であるが、首よりも下の部位を対象とするため感染リスクの高い顔面に触れることは稀である。ボール等の用具を使わないことから、偶発的なプレーヤー同士の接触も起こりにくいため、各自の意識で不要なコンタクトは回避できる。

スポーツ鬼ごっこのゲーム開始・終了時には、原則、相手選手との握手が行われる。これは互いへのリスペクトを表明する行為であるが、感染症予防の観点からは他人と手のひら全面を密着させることは避けたい。代替行為として、相手との接触面積を減らす（例：グータッチにより手の甲を点で接触させる）、非接触の共通の所作を行う（例：合掌する）などの対策が各チームでとられている。大切にすべきはリスペクトの心を体現することであり、握手以外の方法で表現することは望ましい在り方である。

以上から、スポーツ鬼ごっこは With コロナ状況下にあっても、他の各種スポーツと比較し安全・安心な環境で実施しやすい種目であると考えられる。種目の特徴を理解し、対象者の事前の健康管理や消毒体制の確保を十分に行った上で、多くの人々が楽しめる場を各地でつくっていききたい。

■引用・参考文献

- [1] 狩野孝之, 2017, スポーツ現場で問題となる感染症とリスクマネジメント, びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 14, 201-203.
- [2] David Pierce, Jessi Stas, Kevin Feller, and William Knox, 2020, COVID-19: Return to Youth Sports - Preparing Sports Venues and Events for the Return of Youth Sports, Sports Innovation Journal, 1, 62-80.